

【資 料】

平成 28 年度林業研究・技術開発推進近畿・中国ブロック会議育種分科会

林 勝 洋¹

平成 28 年度林業研究・技術開発推進近畿・中国ブロック会議育種分科会は、10 月 5 日に近畿中国森林管理局において、林野庁、近畿中国森林管理局、関西育種基本区内の各府県及び関係機関から 51 名が出席して開催された。

最近の林木育種の情勢について

林野庁から、林木育種に関する情報提供として、「マツノザイセンチュウ抵抗性品種開発技術高度化事業（継続）」、「苗木安定供給推進事業（継続）」、「次世代林業基盤づくり交付金」、「森林環境保全総合対策事業（拡充）」、「花粉発生源対策の推進」及び「特定母樹の増殖等について」の説明があり、また、林木育種センターからは、「花粉症対策品種の開発推進について」、「第 4 期中長期計画について」、「林木育種のスピードアップに向けた最近の対応について」及び「次期の林木育種推進計画の策定スケジュールについて」の説明があった。

林木育種の推進について

(1) 林木の新品種の開発

関西育種場から以下の説明を行った。

①エリートツリー（第 2 世代）の開発について、四国北部及び四国南部育種区で、平成 27 年度までにスギエリートツリーが 76 系統、ヒノキエリートツリーは 52 系統が認定され、特定母樹では、平成 27 年度までにスギ 26 系統、ヒノキ 14 系統が指定された。また、近畿、瀬戸内海、日本海岸西部育種区では、平成 27 年度までにヒノキエリートツリー 73 系統が認定された。なお、原種の配布は、平成 25 年度からエリートツリー、平成 26 年度から特定母樹を開始した。

第 3 世代選抜のための育種集団の造成では、スギエリートツリー等による人工交配を進めており、スギエリートツリーの性能評価試験を兼ねた育種集団林を平成 25 年度に 2 ヶ所、平成 26 年度に 2 ヶ所を設定し、四国森林管理局と共同で初期成長の調査を実行中である。

②マツノザイセンチュウ抵抗性品種の開発については、山陰・北陸地方向け品種として、平成 27 年度までにアカマツ 52 品種、クロマツ 42 品種を開発した。また、瀬戸内海・四国・近畿地方向け品種では、平成 27 年度までにアカマツ 46 品種、クロマツ 9 品種を開発した。今後は、山行き苗木の抵抗性を高めるため、抵抗性マツの現地での性能評価や、より抵抗性の高い第 2 世代品種の開発を進める必要がある。

③花粉症対策品種の開発については、平成 27 年度までに少花粉スギを 29 品種、少花粉ヒノキを 22 品種開発した。また、平成 27 年度はこれまでに府県と育種場により得られたデータを再吟味し、低花粉スギ 5 品種を開発した。

無花粉スギの開発では、成長や材質等に優れた無花粉スギ品種の育成をめざし、林木育種センターで開発した無花粉スギ「爽春」及び「三重不稔（関西）1 号」と、成長や材質等の優れたスギ精英樹等との人工交配を進めており、作出した無花粉スギは定植し、成長等の品質を調査中である。

(2) 育種種苗の生産と普及

育種種苗の生産と普及の状況及び林木遺伝資源の収集・保存について、実績と計画の説明を行った。関西育種基本区における平成 26 年度の育種種苗の使用率は、スギは 80%、ヒノキは 99% となっている。

林木育種事業の取り組みについて

平成 28 年度は、各府県ともにほぼ前年並みの事業・研究の取り組みが計画されており、エリートツリー及び特定母樹の採種園の造成が複数の県で進められる。また、少花粉スギ、ヒノキ採種園の改良、造成が複数の県で進められる。

協議事項及び要望事項について

協議事項では、①マツノザイセンチュウ抵抗性育種に関して最近の話題や解決が求められている事項、②花

¹はやしかつひろ 森林総合研究所林木育種センター関西育種場

粉発生源対策に資する育種に関して最近の話題や解決が求められている事項及び③スギ・ヒノキ精英樹に関して最近の話題や解決が求められている事項について、今後の課題と対策等の意見交換を行った。

また、要望事項では、①マツ材線虫病の被害が発生

する齢級に達した抵抗性マツの抵抗性強度の調査について、②関西育種場で開催する研修会の年間スケジュールについて、③花粉症対策苗木のトレーサビリティの仕組みの構築について要望が出され、意見交換等を行った。